

No	提 案 名	提案団体名		
		代表者氏名	所 属	
10	老いて愉快だ宇都宮	宇都宮大学 森本組		
		宮田 野乃香	宇都宮大学 工学研究科	
			指導教官 氏 名	森本 章倫

1 提案の要旨

現在、少子・高齢化による人口減少社会の到来、それに伴う中心市街地の空洞化や地域コミュニティの衰退など様々な問題が起きている。それは宇都宮市においても例外ではない。こうした問題の打開に向け同市は、平成 20 年 3 月に「第 5 次宇都宮市総合計画」を策定している。その中で、まちづくり戦略プランのひとつに“幸せ力”アップ戦略を掲げ、いくつかのプロジェクトを展開している。本提案で注目したのは“げんき高齢者パワー”地域づくり応援プロジェクトである。支えられる世代として認識されてきた高齢者は、いわゆる「アクティブシニア」と呼ばれ、地域づくりの一員となり活躍していくことが求められている。具体的には、団塊・シニア世代の総合相談センターの設置、高齢者の社会活動支援の充実、高齢者の健康づくりの推進を行っている。

みやシニア活動センター（平成 20 年 7 月に設立）では、シニア世代の第 2 の人生を支援している。平成 23 年の利用者数は 841 人（目標値：500 人）に達しており、満足度は 30.2%、重要度は 76.2%という成果を出している。利用者は年々増加傾向にあるものの、満足度は高いとは言えない。すなわち、制度自体が魅力的で利用者の満足が得られないと、本当の意味での高齢者の生きがいづくりとしては達成できていないと考えられる。

元来、地域に根付いていたコミュニティが高齢者をはじめ、様々な世代の交流の場となっていた。しかしその地域コミュニティが衰退し、地域力の低下が懸念されるようになると、それらの解決策として同市では様々な施策が実施された。だが、それら施策は本来地域コミュニティが担っていた役割を果たしていないと考えられる。

そこで本提案では、今後深刻化すると考えられる高齢化問題の現状を把握し、その対策を他都市の事例などを参考に提案することで、老後も人々がいきいきと生活できる社会の実現を目指す。

2 提案の目標

本提案では、これまでに確立されてきたコミュニティを利用する事業と新たに作り出す事業の両面から考えていく。前者は、井戸端会議や病院の集まりのような強く定着している地縁型コミュニティを利用し、新たに高齢者が責任感を持ち、必要とされていることを認識できる環境を継続させることが狙いとなる。後者は、イベント性と出会いを提供し、これまで異なるコミュニティにいた高齢者同士が、新しく幅広い交流関係を形成することが狙いとなる。

対象者は、団塊の世代や退職後すぐの高齢者とする。人生の転換期にこうした事業を設けることで、受け入れやすく、多くの人々が参加し易いため人間関係の構築に繋がる。こうして作られた友人は将来的に頼れる存在となることも期待できる。

そこで本提案では、既存のコミュニティを発展させた事業と新規のコミュニティを創造する事業を提示することを目標とする。

3 現状の分析と課題

3-1. 高齢者が抱える問題点について

3-1-1. 高齢社会の現状

平成 22 年の国勢調査によれば、65 歳以上の高齢者は約 2927 万人となり、割合では全世代の約 23%を占めるまでになった。また、国立社会保障・人口問題研究所の将来人口推計(図 3-1-1)によれば、高齢者の人口は急速に増加し、2040 年頃には、3800 万人を超え、3 人に 1 人が高齢者となると予測されている。

65 歳以上の人が総人口に占める割合のことを高齢化率といい、この高齢化率が 7%を超えると「高齢化社会」、14%を超えると「高齢社会」、21%を超えると「超高齢社会」という。つまり、現在の日本は「超高齢社会」に突入し、世界中の誰もが体験したことのない、未知の領域に足を踏み入れたことになる。

また、高齢化に伴い、高齢者の独り暮らしも増えている。高齢者の単身世帯は 1980 年には男性約 19 万人、女性約 69 万人だったが、2000 年にはそれぞれ約 74 万人、229 万人と大幅に増加している(図 3-1-2)。これらの原因は、未婚率や離婚率の上昇、配偶者との死別後も子どもと同居しない高齢者が増えていることなどが考えられる。また、高齢者の 64%が単身もしくは夫婦のみで暮らしており、そこから男性で 15 年、女性で 20 年以上も余命があることから、人生の最後を孤独で過ごす高齢者の割合は非常に大きいと言える。

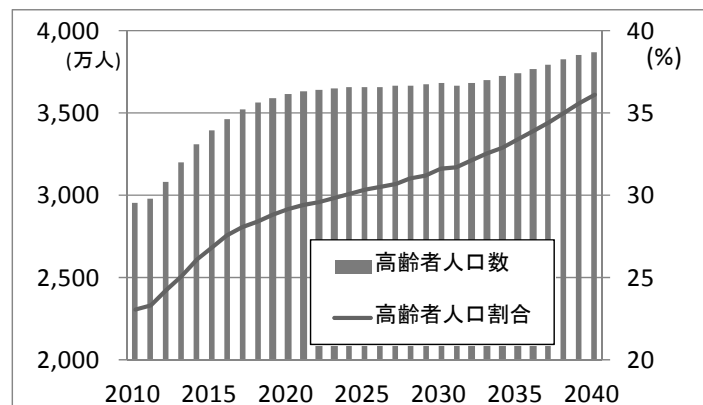


図 3-1-1 高齢者の将来人口推計

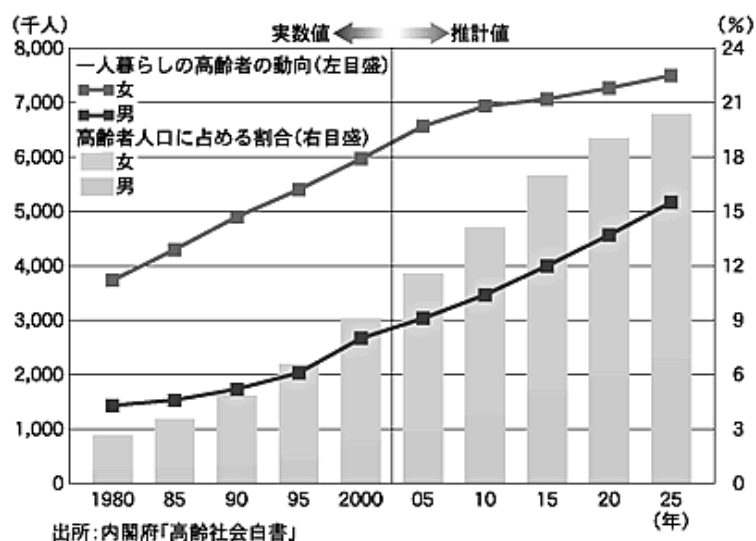


図 3-1-2 一人暮らしの高齢者の動向

3-1-2. 高齢者の日常生活に関する問題点

高齢化が進展する中で、内閣府は毎年、高齢社会対策に関する調査を行っている。その中で平成16年に行われた「高齢者の日常生活に関する意識調査」では、将来の日常生活の不安について高齢者はこのように答えている(図3-1-3、図3-1-4)。この結果からみてわかるように、高齢者の多くは将来に不安を感じており、特に健康・介護・収入への不安が多い。しかし、その次に来るのは頼れる人がいなくなることにに対する不安や近隣・親戚・友人などとの人付き合いに対する不安であり、多くの高齢者が孤独に対する不安を抱えている。

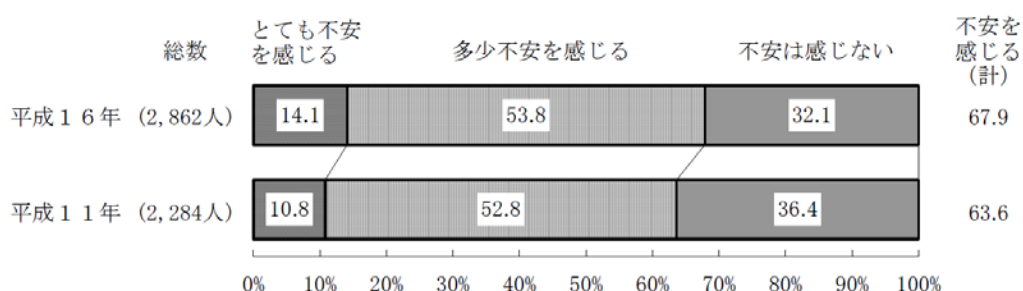
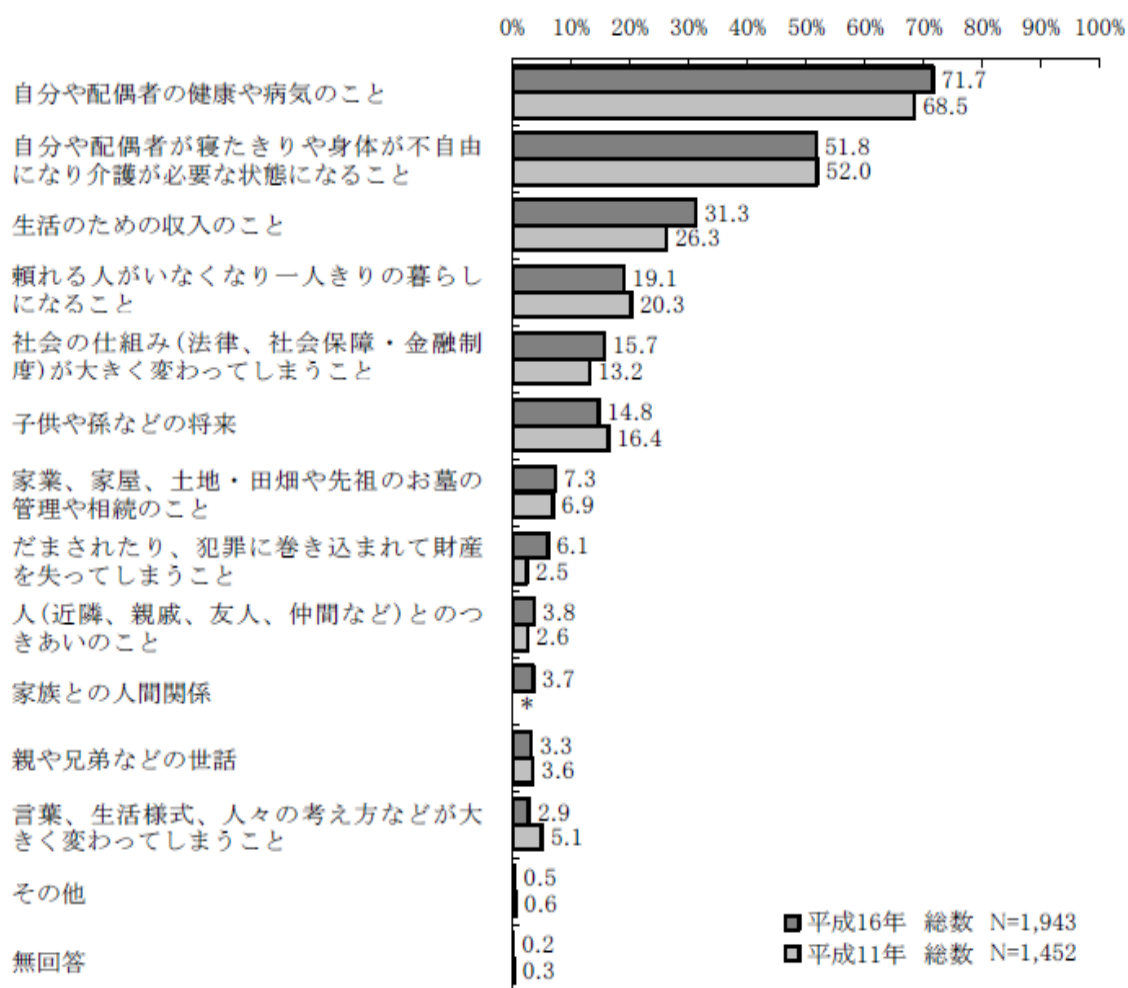


図3-1-3 将来の日常生活への不安



注) *は調査時に選択肢がなく、データが存在しないもの。

図3-1-4 高齢者が日常生活で不安を感じる理由

3-2. 宇都宮市の問題点について

3-2-1. 宇都宮市の高齢化問題

高齢化問題は宇都宮市も例外ではない。特に宇都宮市では中心市街地の高齢化が深刻化している(図 3-2-1)。宇都宮市における中心市街地とは、宇都宮市中心市街地活性化基本計画によると、「センターコアと JR コア、及びそれらを結ぶ地域とその周辺地域」と設定されている。センターコアとは、二荒山神社と宇都宮城址公園を結ぶ「歴史軸」や、商店街が多い大通り、オリオン・ユニオン通り、東武宇都宮駅を含む地域のことで、JR コアとは JR 宇都宮駅とその周辺地域のことである。平成 11 年において、宇都宮市全体の高齢化率は 13.9%、一方、中心市街地の高齢化率は 24.8%となっており、平成 21 年では市全体が 19.1%、中心市街地が 29.0%と市全体と中心市街地では大きな差が生まれている。

中心市街地は、コミュニティや「食」「歴史・文化」「芸術」「スポーツ」「娯楽」といった多様な機能を持っており、中心市街地の衰退は市全体の衰退に直接つながると思われる。また、中心市街地の「高齢化」と「衰退」が相互に影響し、負のスパイラルが発生し、事態をさらに深刻化させている。

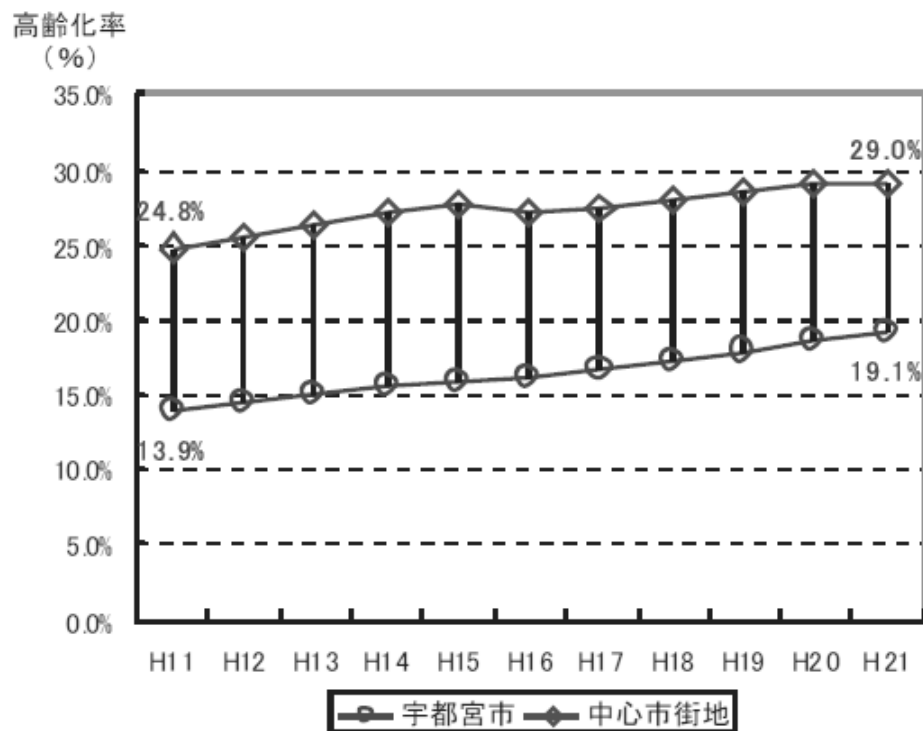


図 3-2-1 宇都宮市と中心市街地の高齢化率

3-2-2. 宇都宮市の空き家問題・対策の事例

前項では、宇都宮市の中心市街地の高齢化と衰退について述べたが、宇都宮市では空き家問題も同様に深刻化しており、空き家・空き店舗の増加は中心市街地の衰退に影響を及ぼしている。宇都宮市の平成 20 年における空き家数は、約 32,000 戸。空き家率は 13.8%となっており、全国平均の 13.1%を上回っている(図 3-2-2)。空き家・空き店舗が増加すると、街の密度は低下し、宇都宮市の施策のひとつであるネットワーク型コンパクトシティのあり方とは離れてしまうものと考えられる。その結果、日常生活におけるトリップ長の増加、高齢者や交通弱者にとって生活しづらい環境が形成されることとなる。また、近隣住民で作っていた老人会などのコミュニティも維持が困難になり、近所づきあいが希薄になることも問題点とされている。

宇都宮市では、平成 17 年に「若年夫婦世帯家賃補助制度」を策定している。これは中心市街地以外の区域から、中心市街地に転居をした若年夫婦世帯に対して家賃補助を行うもので、積極的

に中心市街地に住んでもらうことをねらいとしている。また、制度利用者の入居先として空き家
が選択されることもあるため、空き家対策にも一役買っている。

空き家対策について他県に目を向けてみると、富山県滑川市では、平成 20 年 4 月からまちなか
再生事業の一環として、「危険老朽化空き家対策事業」を行っている。この事業は、防災・防犯等
の観点から居住環境の向上を図り、市民の安全と安心を確保することを目的としている。事業内
容としては、市街地の老朽化した危険な空き家のうち、所有者が土地を含めて寄付した家屋を市
が取り壊すものである。取り壊し後は、町内会での管理のもと公共空き地として活用する。対策
事業の流れを図 3-2-3 に示す。

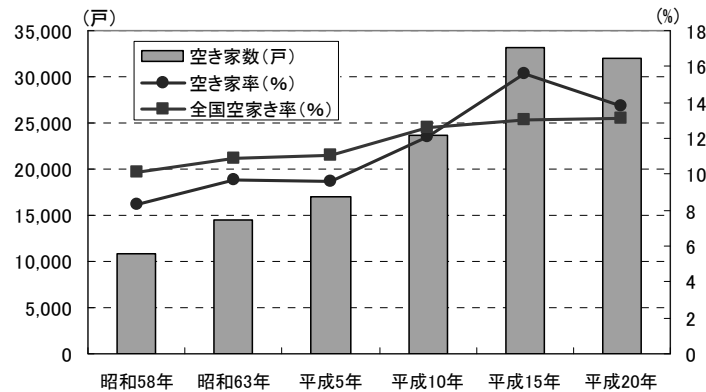


図 3-2-2 宇都宮市の空き家状況

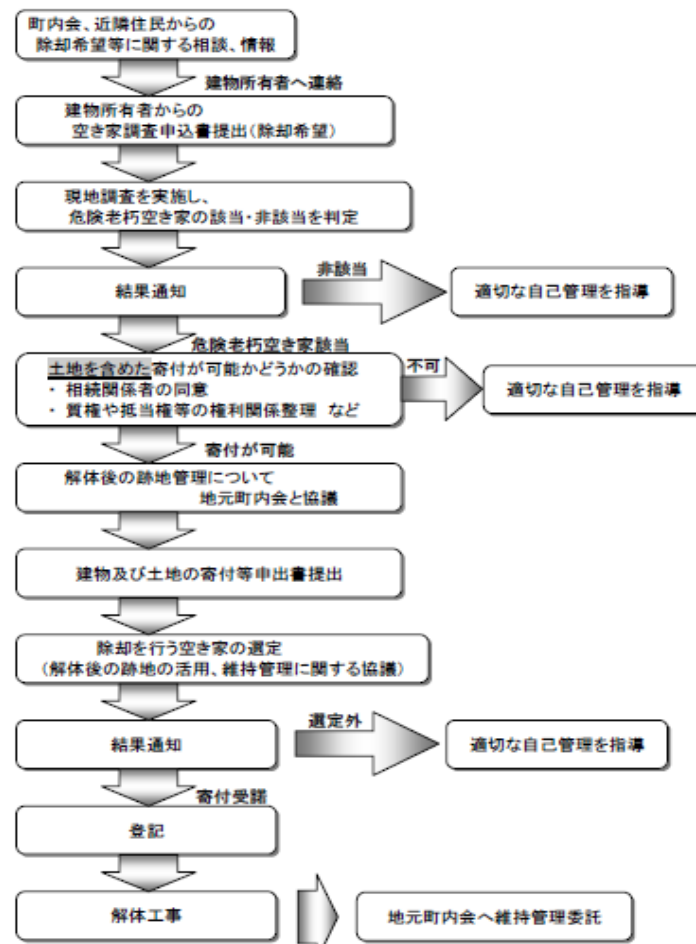


図 3-2-3 危険老朽空き家対策事業の流れ

3-3. 高齢者コミュニティの現状

3-3-1. 高齢者の生活実態に関する調査

内閣府「高齢者の生活実態に関する調査」（2009 年）から高齢者の社会的孤立の状況をみる。同報告書では、高齢者の孤立状況を日常生活における「会話の頻度」、「困ったときに頼れる人の有無」、「社会活動への参加や交流等の状況」の3点から分析している。

・会話の頻度

「会話の頻度」では、毎日会話する人が、全体の9割以上を占め、「2～3日に1回以下」より少ない人（以下、「会話頻度の少ない人」）は1割未満。「会話頻度の少ない人」の属性をみると、年齢が高い人ほど、暮らし向きが苦しい人ほど、健康状態がよくない人ほど、町内会やボランティア活動、趣味・スポーツ活動、友達づきあいへの参加が少ない人ほど、その比率が高い傾向がみられる。性別・世帯構成別の「会話頻度の少ない人」の割合は、一人暮らしの人が高く、配偶関係別では離別者、未婚者が高い。このように世帯構成や配偶関係の違いが会話の頻度を大きく左右していることが分かる。また、借家暮らしの人が持ち家の人に比べ会話頻度が低く、都市規模別にみても大都市ほど会話頻度が低い人の割合が高くなっている。

・困ったときに頼れる人の有無

「困ったときに頼れる人の有無」では、暮らし向きや配偶関係、健康状況、住宅所有形態で、「会話の頻度」と同様の傾向がみられる。特に、一人暮らし男性の4人に1人は「いない」と回答しています。ここでも借家暮らしの人は、持ち家の人に比べ4倍近くが「いない」と回答しており、住宅の所有形態の違いが地域のつながりの有無にかなり関わっていることがわかる。

このように同じ高齢者といってもその世帯構造や配偶関係が社会的孤立状況と深く関わっており、借家住まいの一人暮らし、とりわけ男性が最も社会的孤立が懸念される高齢者像として浮かび上がってくる。

・社会活動への参加状況

「社会活動への参加や交流等の状況」は、年齢が高い人ほど、暮らし向きが苦しい人ほど、健康状態がよくない人ほど低調であるといえる。

低い	年齢	高い
ゆとりあり	暮らし向き	苦しい
良い	健康状態	悪い
夫婦のみ、その他	世帯構成	一人暮らし
夫婦（同居）	配偶関係	離別、未婚
持ち家	住宅所有形態	借家
低い	社会的孤立度	高い

図 3-3-1 社会的孤立度と高齢者の主な属性

3-3-2. 世帯類型に応じた高齢者の生活実態に関する意識調査

内閣府「世帯類型に応じた高齢者の生活実態に関する意識調査」（2005 年）によると、高齢者の世帯類型別の生活実態は、一人暮らし高齢者の社会とのつながりの薄さが高齢期の QOL（生活の質）と密接に結びついている。

高齢期の社会的な孤立を防ぎ、地域社会とのつながりをつくるためには社会参加を促進することが不可欠である。内閣府「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」によると、今後、地域活動に参加したい人や NPO 活動に関心がある人の割合は上昇しており、地縁的なつながりが薄れる反面、共通の価値観や関心事におけるつながりを求める高齢者が増えていることがわかる。

この高まる高齢者の社会参加意識を実際の行動に移すために高齢者に地域活動や NPO 活動を紹介・マッチングする NPO もある。しかし、長く企業社会で過ごした高齢者にはなかなか地域での働き方に馴染めず、居場所を見つけることができる人は少数。高齢者の地域における社会参加を促進するためには、高齢者をはじめとした様々な人が集えるコミュニティ形成の中心としての

施設空間（ハードウェア）整備と、そこで多世代が交流するためのプログラム（ソフトウェア）の充実、そして高齢者が様々な人や地域とのつながりをつくり出すコミュニケーション能力（ヒューマンウェア）の養成が重要になると考えられる。

3-3-3. 成功事例

老人の街・サンシティ

アリゾナ州のサンシティは、米国を代表する年齢制限型（住民は原則 55 歳以上）のシニアタウンである。その開発コンセプトは、「活動的な退職者のコミュニティ」の形成であり、高齢者がリタイア後も健康かつ快適に暮らすシニア・コミュニティの典型的な成功事例として現在も注目されている。

この街に住むための条件は、夫婦のいずれかが 50 歳以上である事と、貯金や年金などで、働かなくても生活できる事である。気候は（暑すぎる夏を除き）年中温暖で、高齢者には絶好の居住環境である。サンシティは、1960 年に民間デベロッパーのデル・ウェブ社によって開発された。サンシティの開発面積は全体で約 3,560ha、2000 年における人口は約 38,000 人である。1978 年に開発事業は終了している。すでに 3 万戸の住居は完売になっており、街の西側にはサン・シティ・ウエストも建設された。2 つの街の総面積は、東京でいえば、品川・目黒・渋谷・中野・北の 5 区の合計面積に相当する。

街は 7 つの円状の街区からなり、どの家からも 1 マイル以内で円の中心にあるセンターに行くことができる。そこにはショッピング・センター、レクリエーション・センター、銀行、郵便局などの機能が集まっている。レクリエーション・センターにはプール、テニスコート、温泉、図書館、ジム、スケート場などの施設があり、美術・手芸・木工・模型・洋裁など 35 のサークル・ルームが準備されている。

デル・ウェブ社はすでに、街の運営を住民の自治に任せている。街にはラジオ局や新聞社、電話局、中央郵便局、図書館、自衛団や消防団などがあるが、これらのスタッフのほとんどがボランティアによってまかなわれている。

サンシティの住民がいかに健康で若々しい生活を送っているかというデータを示す。当時の住民の平均年齢は 68 歳。しかし、中央病院にある 280 の入院用ベッドのうち使用されているのは、たった 90 余りにすぎなかった。単純計算すると、この街の入院患者は 1000 人あたり 1.6 人。

サンシティの特徴は、“ボランティアのまち”と呼ばれるほどボランティア活動が盛んであること、住民により公共施設等の管理運営（管理運営法人の設立）がなされていること、NPO 等によってコミュニティサービス（整備、福祉、道路・公園管理等）が提供されていることなどである。また、最近では、管理運営費用の住民負担の問題、公共施設等の維持コスト増加の問題、住民のさらなる高齢化の問題などへの対応が課題となっている。

日本での明らかな成功事例は見当たらず、上述したサンシティについても広大な敷地など、日本での実践にはいくつか課題点が拭いきれない。すなわち、こうした高齢者限定施設などを日本で実践すると、敷地や住宅、その他各種の施設数に限りがあり、そこへ見込める顧客は、資金的にかなり余裕のある高齢者に限られるものと考えられる。

以上より、日本で高齢者コミュニティを考えていく場合、限られたスペースや人々の生活習慣の違い、四季のある気候など考慮すべき点を整理し、日本ならではの良さを活かした企画をする必要があると考えられる。狭いことは、出来ることの範囲を狭めてしまうかもしれないが、人々が近くにいることで密なコミュニティを形成し、維持しやすいともいえる。次章からは、そうした密な高齢者コミュニティを継続的に保持し、元気な高齢者がまちを動かすための施策案を示す。

4 施策事業の提案

上述してきたように、近年活気の薄れてきているまちや、周りとの交流が減少した高齢者たちが問題視されている。このことはまち自体のにぎわいや人々の活力を低下させ、経済的にも悪影響を及ぼしている。そこで人口の多くを占め、時間にも余裕のある高齢者に焦点を絞り事業を提案していく。今回の提案事業は「かたらい場」と「じばこん」の2つであり、「かたらい場」は既存のコミュニティを発展させたもの、「じばこん」は新規コミュニティを創造するものである。

4-1. 避暑シェルター（節電コミュニティ）：かたらい場

4-1-1. 概要

この事業は、高齢者による高齢者のための集会所を作るというものである。「かたらい場」という事業名は、高齢者にとっていつでも気軽に足を運べる場を目的とし、わかりやすく、なおかつ事業内容で最も重要視している語り合いという意味を含めたものである。集会場をつくるだけでは今までに行政が用意してきたコミュニティセンターなどと変わらない。そこで、高齢者が自発的に来たいと思わせる動機が必要になる。動機として考えられるのは、多くの人が集まっていること、おいしいお茶を飲めたり、趣味の話ができること、自分にも役割があることである。具体的には、高齢者にコーヒーを出す、何か趣味の作品を売る、共有の農園を管理するなどをしてもらい、簡単なお店の経営をしてもらう。かたらい場ではある既存のコミュニティを利用し、そのコミュニティ内の人間が当番制で運営をしていく。それにより一人一人にある程度の責任感、役割を持たせることが可能となる。この事業を行う際、初めに利用できると考えられる既存のコミュニティは、老人会や近所の集まり、病院仲間などが挙げられる。

事業計画段階や開店時における宣伝は、行政による場所や機会の提供を受け、実施する。宣伝方法は、ラジオや回覧板、テレビ、イベントなどが考えられる。その後事業が軌道に乗り始めると客の口コミや、高齢者同士の繋がりなどから少しずつ広まっていくと期待できる。

また、事業を行う場所に関しては行政が事例にもあった「危険老朽空き家対策事業」の流れを利用して用意する。本提案における空き家利用のシステムを図 4-1-1 に示す。

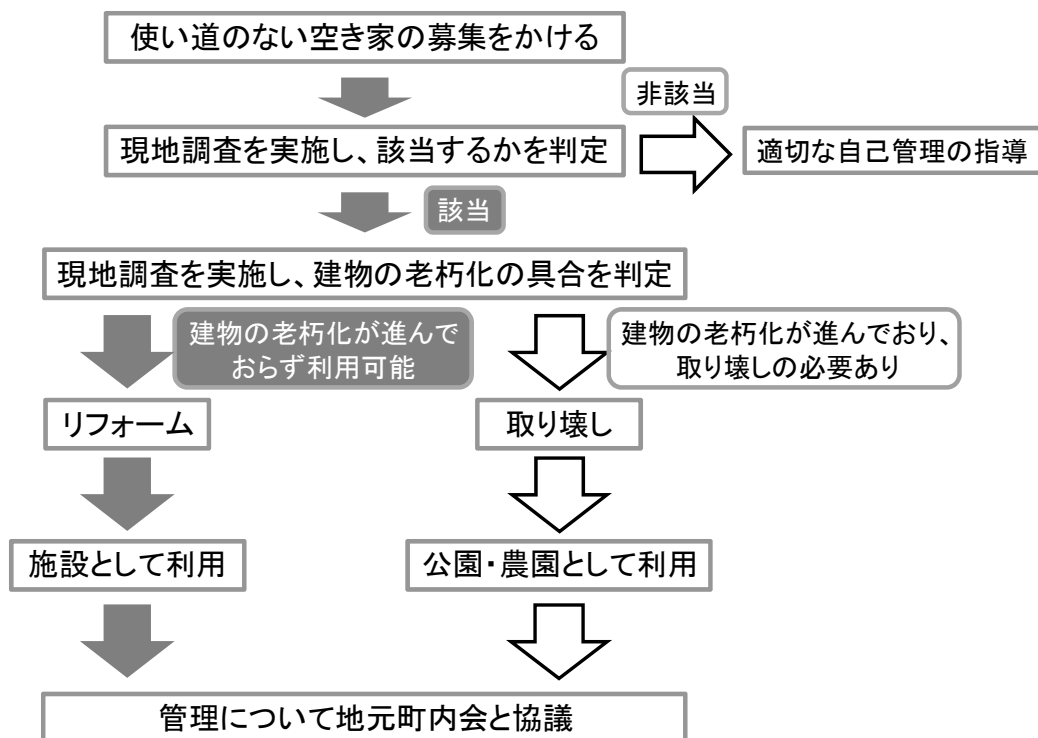


図 4-1-1 空き家利用システム

4-1-2. 効果

この事業を行うことによって得られる効果には、直接的な効果と派生的な効果がある。直接的な効果としては、高齢者の心身の充実、経済効果、高齢者の健康状態の確認、節電が挙げられる。基本的にかたらい場は毎日高齢者同士が顔を合わせることを想定しているので、健康状態を互いに確認しあうことができる。それにより、急に姿を見せなくなったなど、少しの変化にも気づきやすくなるため、緊急時に早急な対応が出来、孤独死を防ぐことも可能となる。

派生的な効果は高齢者の新たなコミュニティの創造である。かたらい場から派生し生まれる新たなコミュニティの種類としては、旅行、様々な趣味のサークル、ふれあい教室などが考えられる。もともと存在していたコミュニティの構成メンバーとは違った仲間との交流が増え、高齢者の生活の質はさらに向上すると思われる。

4-1-3. 問題点及び今後の課題

この事業を行う際の問題点として、組織形態の形成が困難であることが考えられる。この事業時関わる高齢者の多くは事業運営の経験が乏しく、ノウハウがないと思われる。また、既存のコミュニティを利用するにしても、多くの人の意識が統一されているとは言えず、事業の決定が困難になることも考えられる。そのため、市が運営方法や、ある程度事業が軌道になるまでのサポート、資金管理などを行う必要があると考えられる。

4-2. 高齢者版街コン：じばこん

4-2-1. 概要

この事業は、近年宇都宮市で定着してきた「宮コン」の対象を高齢者に絞ったものである。「じばこん」という事業名は『おじいちゃん、おばあちゃんのためのコンパ』という意味と、『地場産業コンパ』という意味を掛け合わせたものになっている。高齢者が主体の企画であるため、宮コンとは内容を変更していく必要がある。

- ・開催時間に関しては高齢者の生活リズムに合わせ、平日のお昼頃が適切であると思われる。
- ・内容に関しては、食事を共にするだけでなく、ゲートボールやウォーキング、カラオケ、写真、ゲームセンターなどのアクティビティを行う場も提供する。
- ・じばこんは男女の出会いの場の提供だけでなく、共通の趣味を持った同性の友人を探す場としても有効であると考えられる。
- ・じばこんという事業に付加価値をつけるため、地域の高級料亭などに協力してもらい、プレミアム感を持たせる。

この事業は、新規のコミュニティの創造を主たる目的としている。イベント性も高く、ある程度遠くからの集客も考えられるため、基本的には全く違うコミュニティから来た参加者同士の交流の場となることが期待できる。

事業を運営する団体としては、ノウハウなどがある宮コン実行委員会がよいと思われる。もちろん宮コン実行委員会にプラスして、参加対象者である高齢者も事業内容の考案をしてもらう。また、行政には運営団体の支援を行ってもらう必要がある。

じばこんの開催に伴う宣伝やスペースの確保は、かたらい場と同様に行う。

4-2-2. 効果

この事業を行うことによって得られる効果には、直接的な効果と派生的な効果がある。直接的な効果としては、新たな出会いの場の提供、経済効果、中心市街地の活性化が挙げられる。人々が学校や会社に行っている時間を狙った事業のため、お店としてももともとは集客数が見込めなかった時間帯に利益を得ることが可能である。また、同様の理由から外を出歩いている人間が少なかったのに対し、まちなかを人でにぎわった状態にすることができる。

派生的な効果としては、新たな分野の友達ができる、コミュニティや老人会同士の交流ができる、さらには恋愛にも発展するなどのことが考えられる。じばこんは身近な人間とのコミュニテ

ィだけが強くなりがちな高齢者に新しい出会いの場を与えることができる。同じ趣味を持った仲間を見つけることも可能であるし、自分は全く知らなかった別の趣味を見つけることもできる。また、新たな友達ができることによって、個人の交流から今までは絡むことのなかったコミュニティや老人会と触れ合うきっかけづくりに発展することが予測される。

4-2-3. 問題点及び今後の課題

この事業を行う際の問題点として、宮コンと同様にお店の協力が得られ、集客数が見込めるかが挙げられる。さらに、この事業の効果として挙げた新規コミュニティへの発展であるが、確実に派生していくかには疑問が残る。そのため、新規コミュニティへの発展に関しては各自に任せるのではなく、市が協力して斡旋や宣伝等を行う必要があると考えられる。

5 おわりに

本提案では、今後ますます問題となるであろう高齢者コミュニティへの対策を検討してきた。提案内容は、既存のコミュニティを発展させた「かたらい場」と新規コミュニティの創造をする「じばこん」の2つを挙げた。「かたらい場」は高齢者による高齢者のための集会所を目指しており、「じばこん」は新たな出会いの場の提供と地域活性化を目指している。今回提案した2つの事業は、旅行などの他のコミュニティへ派生し、様々な世代との交流を行うきっかけとなることが期待できる。

今回の提案は、宇都宮市の地域力 UP について考える貴重な機会であった。この提案が、宇都宮市の地域力向上の一助になれば幸いである。

宇都宮大学 森本組

宇都宮大学大学院工学研究科 宮田 野乃香
大武 博史
津國 翔太

【参考文献】

- 1) 第5次宇都宮市総合計画（平成20年3月）宇都宮市
- 2) 国立社会保障・人口問題研究所 HP : <http://www.ipss.go.jp/>
- 3) 高齢社会対策 高齢社会対策に関する調査 : <http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/kenkyu1.htm>
- 4) 宇都宮市中心市街地活性化基本計画 :
<http://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/machizukuri/shigaichi/009655.html>
- 5) 滑川市 HP : <http://www.city.namerikawa.toyama.jp/>
- 6) NISSAY 第10回 孤立する高齢者と新たなコミュニティづくり :
<http://www.nissay.co.jp/enjoy/gero/column/010.html>